

(令和6年8月2日)

# 大豆情報

秋田地域振興局農林部農業振興普及課  
No.2

Tel 018-860-3410

Fax 018-860-3834

## 生育に応じた、適期作業の徹底を！

### 1 気象経過と生育状況



図 気象経過と平年値（アメダス秋田、秋田県農業気象システムから引用）

#### <気象と生育の概況>

7月3半旬以降、気温は高く推移しましたが、7月4～6半旬には断続的な降雨となり、日照時間は少なくなりました。

7月31日調査では、草丈は76.7cm(前年比109%)、主茎長は49.2cm(平年比115%)と長く、本葉数10.5葉(平年差-0.1葉)と平年並、分枝数1.7本(平年比86%)と少なくなっている状況でした。管内の開花盛期は、7月30日(平年差+1日)となりました。また、管内の一部ほ場で、大雨による湿害や泥の付着による生育停滞が見られました。

表 大豆定点調査結果(7月31日実施)

	本年	比較	
		平年比・差	前年比・差
草丈	76.7cm	-	109%
主茎長	49.2cm	115%	93%
本葉数	10.5葉	-0.1葉	+0.7葉
分枝数	1.7本	86%	97%

※管内定点ほ場4地点の平均値

## 1) 今後の気象経過

8月1日に仙台管区气象台から発表された東北地方の1か月予報によると、向こう1ヶ月の気温は平年より高いと予想されています。降水量はほぼ平年並み、日照時間は、平年より長くなる見込みです。

特に期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みのため、ほ場の排水対策だけでなく、干ばつ対策についても確認しましょう。

## 2) 開花後の干ばつ対策

大豆は、開花～子実肥大期にかけて水分を多く必要とし、乾燥が続くと減収することがあります。そのため、著しく排水不良なほ場を除き、開花期以降は暗きよを閉めることを検討するなど、大豆の生育に好適な地下水位(40cm)の維持に努めましょう。

また、晴天が1週間以上続き、土が白く乾燥している場合や大豆の葉が立ち、ほ場の半分以上の葉で裏面が見える場合には、畝間かん水を実施してください。畝間かん水は、30a以上の大きなほ場では、ほ場を2～3区画に分け、1日に1区画ずつ2～3日に分けて実施して、畝の崩落や水口の湿害を避けましょう。全体に水が行き渡ったら、速やかに排水してください。

(水回りが悪いほ場や排水が停滞しがちなほ場では湿害の恐れがあるため、畝間かん水は実施しないでください。)

## 3) 開花期追肥

水田転換初年目畑や地力の高いほ場では必要ありませんが、長期にわたり大豆の連作を行っているほ場(土壌や根粒からの窒素供給力の低下が著しいほ場)や湿害により生育不良となったほ場では、窒素追肥効果が認められています。

追肥は、開花期(開花期～開花後10日頃)に硫安または尿素を用い、窒素成分で10a当たり5～10kg施用します。なお、散布した肥料が葉面に付着すると葉ヤケをおこすため、露の残る早朝の散布は注意しましょう。

## 4) 雑草対策

土壌処理剤及び中耕・培土で抑えきれなかった雑草は、手取りまたは大豆生育期処理除草剤による除草を行います。

表 生育期処理除草剤と畦間及び畦間・株間処理剤の使用時期(秋田県農作物病虫害・雑草防除基準)

使用方法	イネ科雑草茎葉散布		雑草茎葉散布(畝間・株間処理)	
除草剤	ナブ乳剤	ポルトフロアブル	バスタ液剤	ロロックス
使用量・薬量	150～200mL/10a	200～300ml/10a	300～500mL/10a	100～200g/10a
希釈水量	100～150L/10a	100L/10a	100～150L/10a	70～150L/10a
使用時期 (使用回数)	ノビエ3～5葉期 収穫30日前まで (1回)	ノビエ3～8葉期 収穫30日前まで (1回)	大豆6葉期～ 収穫28日前まで (3回以内)	大豆3葉期～ 収穫30日前まで (1回)

使用方法	広葉雑草茎葉散布	畝間処理		
除草剤	大豆バサグラン液剤	大豆バサグラン液剤	ラウンドアップマックスロード	ザクサ液剤
使用量・薬量	100～150mL/10a	300～500mL/10a	200～500mL/10a	300～500mL/10a
希釈水量	100L/10a	100L/10a	25～50L/10a	100～150mL/10a
使用時期 (使用回数)	大豆2葉期～ 6葉期(開花前) 収穫45日前まで (1回)	雑草(イネ科を除く) 生育初期～6葉期 収穫45日前まで (1回)	大豆8葉期～ 収穫前日まで (2回以内)	大豆8葉期～ 収穫28日前まで (3回以内)

注1)大豆バサグラン液剤の適用品種は、「リュウホウ」とする。

注2)畦間処理剤、畦間・株間処理剤は、作物にかからないように飛散防止カバー等を使用する。

### 3 病虫害防除について

#### 1)ウコンノメイガ

ウコンノメイガは、7月6半旬(26～31日)に40～60茎当たりの葉巻数を調査し、茎当たりの平均葉巻数が1.3個以上確認された場合は、8月上旬までに薬剤防除を行います。

農作物病虫害発生予察情報 発生予報第4号(7/30、病虫害防除所発表)によると、ウコンノメイガの発生量は少ないと予想されていますが、本種は飛来性であるため、急激に発生量が増加する場合がありますので今後の予察情報に注意してください。



写真 ウコンノメイガによる葉巻

表 ウコンノメイガの薬剤散布

農薬名	希釈倍数(散布液量)		散布時期
カスケード乳剤	4,000倍	150～300L/10a	7月下旬 ～ 8月上旬
スミチオン乳剤	1,000倍		
トレボン乳剤	1,000倍		
プレバソンフロアブル5	4,000倍		

## 2) 食葉性鱗翅目幼虫(ツメクサガなど)

農作物病害虫発生予察情報 発生予報第4号によると、食葉性鱗翅目幼虫の発生量が多いと予想されています。

防除対象がツメクサガの場合には、8月上旬～中旬にエルサン乳剤1,000倍、トレボン乳剤1,000倍、フェニックスフロアブル4,000倍液のいずれかを100～300L/10a散布してください。老齢期になると防除効果が劣るので若齢期(発生初期)に防除しましょう。

防除対象がハスモンヨトウの場合には、幼虫の発生初期に下表の薬剤を散布してください。散布時は、表下の注意事項についてもご確認をお願いします。

表 ハスモンヨトウの薬剤散布

農薬名	使用量または希釈倍率〔散布液量〕		散布時期
トレボン粉剤DL	4kg/10a		7月～9月上旬
アタブロン乳剤	2,000倍	150～300L/10a	
エルサン乳剤	1,000倍		
カスケード乳剤	4,000倍		
グレーシア乳剤	2,000～3,000倍		
トレボンEW	1,000倍		
トレボン乳剤	1,000倍		
ノーモルト乳剤	2,000倍		
パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍		
プレバソンフロアブル5	4,000倍		
ヨーバルフロアブル	5,000～10,000倍		

注)ジアミド系剤(プレバソンフロアブル5等)などの一部の薬剤に感受性の低下が疑われる事例があるため、使用薬剤の選定に注意する。

パーマチオン水和剤は、8月中旬～下旬散布は吸実性カメムシ類にも有効で、8月下旬～9月上旬散布は、マメシンクイガにも有効である。

### 3) マメシクイガ

農作物病害虫発生予察情報 発生予報第4号によると、マメシクイガの発生量は多いと予想されています。

マメシクイガは、本県で最も被害が多い子実害虫であり、被害粒率が30%を超えることもあります。莢表面に産卵し、ふ化した幼虫が莢内に食入して「クチカケ豆」を作ります。連作により密度が高まり、水田転換畑では2～3年目以降に被害が増大します。前年度の被害粒率から越冬したマメシクイガの量が多いことが考えられます。また、連作によって密度が高まるため、連作ほ場では、下表のいずれかで防除をしてください。防除は、薬剤が莢によく付着するように散布してください。

表 マメシクイガの薬剤散布

農薬名	使用量又は希釈倍液(散布液量)		散布時期
トレボン粉剤DL	4kg/10a		アグロスリン乳剤
アグロスリン乳剤	2,000倍	150～300L/10a	アデオン乳剤
アデオン乳剤	3,000倍		パーマチオン水和剤
エルサン乳剤	1,000倍		8月下旬～9月上旬
グレーシア乳剤	2,000～3,000倍		(1回)
スミチオン乳剤	1,000倍		
トレボンEW	1,000倍		他の薬剤
トレボン乳剤	1,000倍		9月上旬(1～2回)
パーマチオン水和剤	2,000～3,000倍		前年度多発している
フレバソンフロアブル5	4,000倍		ほ場では2回散布
ヨーバルフロアブル	10,000倍		

注)アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤は、吸実性カメムシ類にも有効である。

### 4) 紫斑病

農作物病害虫発生予察情報 発生予報第4号によると、紫斑病の感染量は多いと予想されています。

紫斑病は種子伝染し、葉、莖、莢、子実を侵します。紫斑粒を発生させる莢への感染時期は開花10～35日後頃であり、この時期に降雨が続くと莢への菌糸進展が助長されます。莢に感染した菌糸が種子に侵入することで紫斑粒が発生します。下表を参考に、開花期20～30日後に薬剤散布します。また、収穫が遅延した時や収穫後も乾燥が不十分で長期間湿っている時には紫斑粒が増加するため、適期収穫と速やかな乾燥を行います。

表 紫斑病の薬剤散布

RACコード	農薬名	使用量又は希釈倍液(散布液量)	散布時期及び回数
M3	ジマンダイセン水和剤 ペンコゼブ水和剤	400倍	150~300L/10a 1~2回(1回防除が基本で着莢期に降雨が多い場合には2回防除) 1回目:開花期20~30日後 2回目:1回目の約10日後
U16	トライフロアブル	1,000倍	
10・1	ニマイバー水和剤	1,000~2,000倍	
3	プランダム乳剤25	3,000~5,000倍	
M1	Zボルドー	500倍	
M1	Zボルドー粉剤DL	3kg/10a	

注)ニマイバー水和剤、プランダム乳剤25は耐性菌出現回避のため、各1回の使用とする。  
ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は使用時期に注意する(収穫45日前まで)。

### 5)吸実性カメムシ類

農作物病害虫発生予察情報 発生予報第4号によると、吸実性カメムシ類の発生時期は早く、発生量はやや多いと予想されています。

子実を吸汁加害する主なカメムシ類はホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ、アオクサカメムシです。加害期間は若莢が着きはじめる頃から莢が黄熟する頃までにわたり、子実の被害は落莢、不稔粒、板莢や歪曲、変色粒など加害時期によって異なります。

初夏~盛夏が高温、多照の年に発生が多くなります。



写真 ホソヘリカメムシ

表 吸実性カメムシ類の薬剤散布

農薬名	使用量又は希釈倍液(散布液量)	散布時期
トレボン粉剤DL	4kg/10a	8月中旬~下旬 (1~2回)
アグロスリン乳剤	2,000倍	
エルサン乳剤	1,000倍	
スミチオン乳剤	1,000倍	
トレボンEW	1,000倍	
トレボン乳剤	1,000倍	
パーマチオン水和剤	2,000~3,000倍	

注)アグロスリン乳剤、パーマチオン水和剤の8月下旬散布はマメシンクイガにも有効である。

**※薬剤の使用にあたっては、希釈率・使用量や使用時期など、最新の“農薬使用基準”を登録情報で必ず確認してください。**

~こまめな水分補給と休憩で熱中症対策を徹底しましょう~